

# 純粹実践理性の根本法則

## — カント倫理学の構造 (3) —

中 野 重 伸

### 1. 原則・格率・法則

カントは純粹実践理性の原則を定義して、「意志の普遍的規定——より多くの実践的規則を自己の下にもつ——を含む命題」であるという。それは、主観的な原則と客観的な原則に分かれ、主観的な原則は「格率」(Maxime)といわれて、「その条件が単にその主体の意志に対して妥当するものとして主体によってみなされる」ような場合である。しかるに客観的な原則は「実践的法則」(praktische Gesetze)といわれて、「その条件が客観的に、即ちあらゆる理性的存在者に対して妥当するものとして認識される」ような場合である。即ち格率は、その原則が成り立つ条件が特定の主体に対してのみ妥当する場合であり、法則はその原則が成り立つ条件がすべての理性的存在者に対して妥当するもの、従って特定の主体の条件によって条件づけられることのないもの、即ちすべての理性的存在者に対して、無条件的に妥当する原則といってよいであろう。<sup>(1)</sup>

カントは定理Ⅰとして、「欲求能力の対象(実質)を意志の規定根拠として前提するあらゆる実践的原理は、ことごとく経験的であり、いかなる実践的法則も与えない」<sup>(2)</sup>という。彼において経験が法則を与えないことは自明のことなのであるが、意志の規定根拠が欲求能力の対象を前提するかぎり、それは経験的に制約されており、従ってそれは法則を与えることができないのである。

さらに定理Ⅱにおいて、「すべての実質的実践原理はそのようなものとしてことごとく同一の種に属する、そして自己愛あるいは自分の幸福という普遍的原理の下に属する」<sup>(3)</sup>という。「すべての実質的実践原理」(alle materialen praktischen Prinzipien)とは、欲求能力の対象を意志の規定根拠とする実践原理はことごとく、ということである。これらの実践原理はことごとく自己愛あるいは幸福という普遍的原理(das allgemeine Prinzip)の下

に属する限り、同一の種なのである。自己愛あるいは幸福は、その内容においては各人において異なるものであり、それを普遍的原理と呼ぶにしてもそれは名目的なものであって、それらがただ欲求能力の対象（実質）を意志の規定根拠としているという点で、「同一の種に属する」（von einer und derselben Art）とされるにすぎない。カントは「幸福」（Glückseligkeit）を定義して、「理性的存在者が持つ、中断されることなくその現存在全体に伴う生の快適さの意識」であるとし、「幸福を意志の規定根拠とする原理は、自己愛の原理である」という。<sup>(4)</sup> 幸福の中味は、「生の快適さの意識」（das Bewußtsein von der Annehmlichkeit des Lebens）であり、その限り、欲求能力の対象（実質）に依存せざるをえないのである。

定理Ⅲでは、「理性的存在者がその格率を実践的普遍的法則と考えるべきときには、実質の面からではなく、単に形式の面から意志の規定根拠を含むような原理としてのみそれを考えることができる」<sup>(5)</sup> という。実践的法則は、欲求能力の対象（実質）を前提するものではありえない。従ってそれは「実質の面から」（der Materie nach）意志を規定するものではありえず、「単に形式の面から」（bloß der Form nach）意志の規定根拠を含むものでしかありえない。即ち実践的法則は、形式的にあるいは形式によって意志を規定するものでなければならないのである。

こうしてカントは、実践的法則は経験的には規定されえず、従って欲求能力の対象（実質）を前提するものではありえないこと（定理Ⅰ）、実質的实践原理は自己愛あるいは幸福の原理にもとづくこと（定理Ⅱ）、実践的法則は形式的に意志の規定根拠を含むものでなければならないこと（定理Ⅲ）を確立し、その上で次の二つの課題を提示する。その第一は、「格率の単なる立法形式のみが意志の十分な規定根拠であることが前提されるとき、それによってのみ規定可能である意志の性質を見出すこと」<sup>(6)</sup> である。即ち格率の単なる立法形式のみによって規定可能である意志とはどのような意志なのか、ということである。「あの普遍的な立法形式以外の他のいかなる意志の規定根拠も、意志にとって法則として役立ちえないとすれば、かかる意志は、現象の自然法則即ち原因性の法則あるいは相互的原因の法則から全く独立した〔依存しない unabhängig〕ものとして考えられなければならない」<sup>(7)</sup> とされる。即ち実践的法則によって規定される意志は、現象の自然法則から独立しているのであるが、欲求能力の対象は現象の自然法則によって規定され、原因性の法則に従って動かされるのである。そこで実践的法則によって規定される意志は、対象によって規定されることなく、従って現象の自然法則によっては規定されないのである。このような意志

のあり方をカントは、「最も厳密な、超越論的意味における自由」(Freiheit im strengsten, d.i. transzendentalen Verstande) と呼び、このような意志、「格率の単なる立法形式のみが法則に役立ちうる意志」を、「自由な意志」(ein freier Wille) というのである。<sup>(8)</sup>

カントは第二の課題として、「意志が自由であることが前提されたとき、そのみが意志を必然的に規定するのに役立つ法則を見出すこと」<sup>(9)</sup> をあげる。即ち自由な意志を必然的に規定しうる法則は何かということである。この点についてカントは次のような説明を与えている。

実践的法則の実質即ち格率の対象は、経験的にしか与えられえず、しかし自由な意志は、経験的な（即ち感性界に属する）条件から独立したものとして、なお規定可能でなければならないので、自由な意志は法則の実質 (Materie) から独立したものとして、それにもかかわらず規定根拠を法則の中に見出さなければならない。しかし法則の実質の外には、立法形式以外の何ものも法則の中に含まれていない。従って立法形式が、それが格率の中に含まれている限りにおいて、意志の規定根拠を構成しうる唯一のものである。<sup>(10)</sup>

即ち自由な意志は、経験的に即ち実質によって規定されることはありえない故に、その規定根拠を法則の中に見出さなければならないとすれば、それは「立法形式」(die gesetzgebende Form) 以外にはありえない。ここで法則と立法形式とは、同義と見てよい。実践的法則は、実質を含みえないからである。そして、「自由と無条件的実践的法則は相互に互いを指示しあう」<sup>(11)</sup> ことになる。即ち自由な意志を規定するものは法則であり、また法則は実質（対象）から独立のものとしてのみ可能である限り現象の法則に支配されず、従って自由な実践において始めて意志を規定しうるからである。

そこで次に、「我々の、無条件的に実践的なものの認識はどこから始まるか、自由からか実践的法則からか」<sup>(12)</sup> が問われることになる。それは自由からではありえず、むしろ我々が直接意識するのは「道徳法則」(das moralische Gesetz) であり、我々が現象の法則に反して、そこから独立になされる道徳法則による意志規定の可能性を意識するとき、我々の意志が自由であることを知るのである。その意味で、道徳法則と自由とは互いに指示し合い、自由の内容は道徳法則にほかならないのである。

## 2 純粋実践理性の根本法則

カントは「純粋実践理性の根本法則」(Grndgesetz der reinen praktischen Vernunft)

として、次の命題をかかげる。

君の意志の格率が常に同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ

(Handle so, daß die Maxime deines Willens jederzeit zugleich als Prinzip einer allgemeinen Gesetzgebung gelten könne)<sup>(13)</sup>

「君の意志の格率が、普遍的立法の原理として妥当しうる」とはどういうことか。「普遍的立法の原理」(Prinzip einer allgemeinen Gesetzgebung)という言い方は、格率が普遍的法則となりうるということを表すとすれば、格率が普遍的立法によって成立した原理となること、即ち普遍的原理となることを指すと考えられる。即ち君の格率が普遍的原理として妥当しうるということである。それを「普遍的立法の原理」と表現するのは、あくまでその格率が理性的存在者による普遍的立法によって成り立つことを示すためであると考えられる。

この根本法則と同じ内容のことが、『道徳形而上学の基礎づけ』において、定言命法の第三の方式(自律の原理)として提示されていた。そこでは、「普遍立法的意志としての各理性的存在者の意志の理念」<sup>(14)</sup>と名づけられ、

意志がその格率によって自己自身を同時に普遍立法的とみなしうるように

(so, daß der Wille durch seine Maxime sich selbst zugleich als allgemein gesetzgebend betrachten könne)<sup>(15)</sup>

と表現されていた。各理性的存在者の意志が普遍立法的であるということは、自ら格率を立てて行為するときその格率が普遍的法則となりうるということである。そして意志がこのように行為するとき、意志はその格率によって普遍立法的(allgemein gesetzgebend)に振る舞っているのである。この法則はもともと定言命法の三つの法式の第三として、第一法式と第二法式の総合として位置づけられ、定言命法の集約とみなすことができる。それが今『実践理性批判』において、純粹実践理性の根本法則(Grundgesetz)として提示されているのである。

純粹幾何学は、実践的命題として要請〔公準〕をもっている。それらは、何かをなすべきことが求められるとき、何かをなしうるという前提以上のものを含まない。そしてこれらの命題は、現存在にかかわる唯一の、純粹幾何学の命題である。従ってそれらは、意志の蓋然的条件の下にある実践的規則である。ここではしかし規則は、人は端的にある仕方で振る舞うべきである、という。実践的規則は従って無条件的であり、それ故に定言的に実践的なアプリアリな命題として表象される。それ故に意志は端的にかつ

直接的に（実践的規則そのもの——それ故にここでは法則である——によって）、客観的に規定される。というのは、純粹な自体的に実践的な理性はここでは直接立法的であるから。意志は経験的条件から独立なものとして、従って純粹な意志として、法則の単なる形式によって規定されたものとして考えられ、この規定根拠はあらゆる格率の最上位の条件とみなされる。<sup>(16)</sup>

純粹実践理性の根本法則の説明において、純粹幾何学における要請〔公準〕(Postulate)が始めに提示されるのはなぜであろうか。幾何学における要請とは、「任意の点から任意の点へ直線をひくこと」、「任意の点と距離（半径）とをもって円を描くこと」、「すべての直角は互いに等しいこと」等である。これらは純粹幾何学を成り立たせるために基本的に要求されることがらであり、これらによって幾何学の内容が展開されるわけである。幾何学ではほかに、定義と公理（共通概念）が前提される。カントは、要請は純粹幾何学において「現存在にかかわる唯一の命題」(die einzigen Sätze, die ein Dasein betreffen)であるという。即ち定義も公理も定理も、現存在にかかわるのではなく、むしろアプリアリに成り立っている概念の世界を開示するものであって、それを現存在において明示しうるのは要請（定規とコンパス）によってなのである。そして要請は、「何かをなすべきことが求められるとき、何かをなしうる」(man etwas tun könne, wenn etwas gefordert würde, man soll es tun) というものである。これは直接的には直線と円を必要に応じて描いてよい、ということである。それによって例えば直角三角形を紙上に描き、補助線等を任意にひいて、概念の内容を現存在の場面に実現することになるのである。カントはさらに、それらは「意志の蓋然的条件の下にある実践的規則」(praktische Regeln unter einer problematischen Bedingung des Willens)であるという。ここで「蓋然的」(problematisch)といわれているのは、直線をひいたり円を描いたりすることが、幾何学を現実の場に行うための必要に応じて求められるのであって、無条件に求められるわけではないということであろう。そして、幾何学における要請のこのような性格に対比して、実践的規則の性格が明らかにされるのである。

さて、「ここではしかし規則は、人は端的にある仕方では振る舞うべきである、という」とカントは指摘する。「ここではしかし」とは、実践的規則においては、幾何学においてはとは異なり、ということである。即ち幾何学においては必要に応じて直線をひき、円を描くことが求められていたけれども、実践的規則においては「端的にある仕方では振る舞うべきである」(man solle schlechthin auf gewisse Weise verfahren) ことが命ぜられる。「端的

に」(schlechthin)とは、無条件的にということである。「実践的規則は従って無条件的(unbedingt)であり、それ故に定言的に実践的なアプリアリな命題として表象される」のである。ここで、「定言的に実践的なアプリアリな命題」(kategorisch, praktischer Satz a priori)という言い方がなされている。「定言的」(kategorisch)とは、言うまでもなく無条件的・絶対的に命ずる命法を指す言葉である。即ちここでいう実践的規則は、無条件的に課せられている規則なのである。そしてこの規則によって「意志は端的にかつ直接的に、客観的に規定される」のである。その理由は、「純粋な自体的に実践的な理性はここでは直接立法的である」ということである。「純粋な自体的に実践的な理性」(reine, an sich praktische Vernunft)とは、各人における純粋実践理性のことであるが、この理性は直接立法的(gesetzgebend)であって、即ち直接法則(Gesetz)を立てて、それによって意志を端的に客観的に規定するのである。そしてこのとき、「意志は経験的条件から独立なものとして、従って純粋な意志として、法則の単なる形式によって規定されたものとして考えられ、この規定根拠はあらゆる格率の最上位の条件とみなされる」のである。即ち意志が端的に客観的に規定されるといっても、それは「法則の単なる形式によって」(durch die bloße Form des Gesetzes)規定されるということである。意志が形式によって規定されるということは、意志が規定される仕方が、格率が普遍的法則となりうるように規定されるということなのである。意志の格率がどのような内容のものであるにせよ、それが普遍性をもちうるということが、意志の立法の条件となるということなのである。そしてこのことが、「あらゆる格率の最上位の条件」(die oberste Bedingung aller Maximen)とならなければならない。そしてそれは、純粋実践理性の根本法則(Grundgesetz)にはかならない。即ち純粋実践理性の根本法則とは、各人の意志の格率が、その都度普遍性をもちうるという「法則の単なる形式によって」規定されているということであり、そのことが各人の個人的経験内容とかかわりなく、意志を規定しているということなのである。

さて純粋実践理性の規則がこのような意味において、端的・無条件的に各人の意志の規定根拠になっているとして、このことと純粋幾何学における要請との比較は、何を意味しているのだろうか。幾何学において要請は、直線をひき、円を描くこととして、アプリアリに成り立っている幾何学的概念の世界を、現存在の場を実現するものだった。それは、その都度の必要に応じて直線をひき、円を描きうることを求めているが、その限り「蓋然的」といわれていた。しかし実践的規則においてはそうではなく、端的・直接的に、従って無条件的に実践的規則が意志を規定することが求められている。実践の場面は、その都

度の現実であるから、理性が現実の場で意志を規定するとき、常に無条件的に実践的規則が規定根拠となっていることが求められているのである。この点で、幾何学の要請が現実との接点にあるにしてもその都度の必要に応じて蓋然的にはたらくのに対して、実践的規則は常に無条件的にはたらいっているという点で、両者は区別される。しかし幾何学的真理がアприオリな概念として現実を越えた理念的世界において成立しているのと同様に、道徳的真理の世界もアприオリに、目的の国の理念として存立しているのであり、この点に両者の比較の根拠がある。ただ実践的規則は、理念的世界としては現実を越えて成り立っているとしても、常に現実の中にはたらいて各人の意志の規定根拠となっていなければならないのである。

事態はきわめて奇異であり、他の実践的認識全体の内にその類例をもたない。というのは、可能的普遍的立法にかんするアприオリな思想——従ってそれは単に蓋然的である——が、経験からあるいはいかなるかの外的な意志から何かを借りることなく、法則として無条件的に命じられているからである。しかしそれ〔法則〕はまた、それによって欲せられている結果が可能であるような行為が、それに従って起こるべきであるような指図ではなく（というのは、そこでは規則は常に自然的に制約されているから）、単に意志をその格率の形式にかんしてアприオリに規定する規則なのである。そしてそこでは、単に原則の主観的形式のために役立つ法則を、法則一般の客観的形式による規定根拠として、少なくとも考えることは不可能ではないのである。我々はこの根本法則の意識を、理性の事実と名づけることができる。なぜならば、我々はそれを理性の先行する与件から、例えば自由の意識（というのはそれは我々に予め与えられているから）から推論することができないから、そしてそれはそれ自体でアприオリな総合命題として我々に迫ってくるからである。この命題は、それが純粹にせよ経験的にせよ、いかなる直観にももとづかない——それは、意志の自由を前提するならば、分析的になるにしても。しかし積極的な概念としての意志の自由のためには知的直観が求められるであろうが、我々はそれをここでは受け入れることはできない。しかしこの法則を誤解なく与えられたものとみなすためには、それが経験的事実ではなく、純粹理性の唯一の事実であり、純粹理性はそれによって、根源的に立法的なものとして自らを告知する（私ハカク欲シ、カク命ズル）、ということに注意しなければならない。<sup>(17)</sup>

カントは、「意志が経験的条件から独立のものとして、従って純粹意志として、法則の単なる形式によって規定されると考えられる」という事態を、しかも「この規定根拠があら

ゆる格率の最上位の条件とみなされる」という事態を、「きわめて奇異である」(befremdlich genuß) といっている。そしてその理由は、「可能的普遍的立法にかんするアプリオリな思想が、経験からあるいはなんらかの外的な意志から何かを借りることなく、法則として無条件的に命じられる」ということである。「可能的普遍的立法にかんするアプリオリな思想」(der Gedanke a priori von einer möglichen allgemeinen Gesetzgebung) とは、意志が普遍的立法により規定されうること、しかもそれがアプリオリに求められているということである。ただ意志は常に普遍的立法によって規定されるわけではなく、むしろ日常的には欲求能力の対象によって規定されることが多い。しかしそこにいつでも、法則の形式がアプリオリに課せられていて、それが最上位にあって意志を規定しているのである。こうしたことを「可能的普遍的立法」と呼んでいるのである。しかもこの規定は、「経験からあるいは何らかの外的意志から何かを借りることなく」法則として無条件的に命じられている。経験から何かを借りるということは、意志が対象によって実質的に規定されるということであり、これは日常的な行動様式を表している。また「なんらかの外的意志から何かを借りる」とは、神の命令として法則を考えることを指すと考えられる。いずれも日常的な行為の動機を説明するにはむしろわかりやすく、通常の方法ではそうなるはずなのである。しかしカントはいずれにもよらないで、しかも法則として無条件的に命ぜられている、というのである。そこに、「奇異である」とされる理由がある。

それは、「意志を単にその格率の形式にかんしてアプリオリに規定する規則」とも言い換えられる。あるいは、「そこでは、単に原則の主観的形式のために役立つ法則を、法則一般の客観的形式による規定根拠として少なくとも考えることは不可能ではない」といわれる。即ち「単に原則の主観的形式のために役立つ法則」と、「法則一般の客観的形式による規定根拠」とが同一視されている。前者は、純粹実践理性の根本法則といわれる道徳法則そのものを指している。しかもそれが「法則一般の客観的形式による規定根拠」と同じとみなされている。即ち道徳法則は、意志を普遍的立法によって規定することを求めるが、普遍的立法は、法則一般の客観的形式にはかならない。即ちこの根本法則において、意志の主観的形式と、法則一般の客観的形式が一致しているのであり、そこに道徳法則の奇異な点があると共に、道徳法則の成り立つ場面そのものが提示されるのである。

カントはかかる事態を指して、「この根本法則の意識を理性の事実と呼ぶことができる」という。それは、日常的意識から見れば、きわめて奇異なことにみえるけれども、「理性の事実」(ein Faktum der Vernunft) として認めざるをえないのである。それは先行する



与件、例えば自由の意識から推論されるのではなく、「それ自体で我々にアприオリな総合命題として迫ってくる」。しかしそれは、純粹直観にも経験的直観にももとづかず、従ってアприオリな総合命題として、理論的に証明されえない。それはただ事実として、しかも純粹理性の事実として受け入れるしかないのである。アприオリな総合命題を事実として受け入れるとは、どういうことであろうか。それは純粹理性において与えられており、しかも経験的な場面に対して規定的でありうるということである。それは経験的な事実ではないが、「純粹理性の唯一の事実」(das einzige Faktum der reinen Vernunft)であり、理性はそれによって「根源的に立法的」(ursprünglich gesetzgebend)であることを自ら示すのである。即ち実践理性の根本法則は、純粹理性のアприオリな総合命題として、現実生活中の場面での行為に対して、意志の規定根拠となりうるということなのである。

### 3. 意志の自律

カントは定理4として、意志の自律について次のように述べている。

定理4 意志の自律 (die Autonomie des Willens) は、あらゆる道徳法則およびそれに適合する義務の唯一の原理である。意志のあらゆる他律 (alle Heteronomie der Willkühr) はそれに対して、責務を基礎づけなければならず、かえって責務および意志の道徳性の原理に対立するのである。即ち法則のあらゆる実質(即ち欲せられた対象)からの独立の内に、そして同時に単なる普遍的な立法形式——実質がそれに適合しなければならぬ——による意志〔恣意〕の規定の内に、道徳性の唯一の原理が成り立つのである。しかしあの独立 (Unabhängigkeit) は消極的意味での自由であるが、純粹なそしてそのようなものとして実践的な理性のこの自己による立法 (eigene Gesetzgebung) は、積極的意味での自由である。従って道徳法則は、純粹実践理性即ち自由の自律以外の何物も表現していない。そして自律は、それ自身その下でのみ格率が最上位の実践的法則と一致しうる、あらゆる格率の形式的条件である。それ故に、法則と結びつけられた欲求の対象以外のものではありえない意欲の実質が、法則の可能性の条件として、実践的法則の中へ入ってくるとき、そこから意志〔恣意〕の他律、即ちなんらかの衝動あるいは傾向性に従う自然法則への依存性が生じる。そして意志は、自ら自己に法則を与えるのではなく、単に感情的法則の理性的遵守への指図を与えるにすぎない。しかしこのような仕方では普遍立法的形式を自己の内に決して含みえない格率は、この仕方では責務を生じることがないだけでなく、それ自身純粹実践理性の原理に、従ってまた道徳的心

術に対立することになる——たとえそこから生じる行為が合法則的であるとしても。<sup>(18)</sup>

意志の自律ということは、『道徳形而上学の基礎づけ』において、定言命法の第三法式を指して言われていた。それは内容において、純粹実践理性の根本法則と同じものである。従って意志の自律は、この根本法則を直接指していると見てよいはずである。そこで、「意志の自律はあらゆる道徳法則とそれに適合する義務の唯一の原理である」という言い方は、そのまま根本法則のあり方を示している。そしてここでは、法則の意欲の実質からの独立 (Unabhängigkeit) 即ち消極的意味での自由と、純粹実践理性の自己立法としての自由 (積極的意味での) を結びつけて、道徳法則が「純粹実践理性の自律」あるいは「自由の自律」にほかならないことが指摘されている。そして自律は、「あらゆる格率の形式的条件」であり、この条件の下でのみ、格率は「最上位の実践的法則」と一致しうるのである。即ち「自律」(Autonomie) とは、意志が欲求の対象に左右されることなく、自己の自由な立法によって自らを導くことにおいて成り立つのであるが、この自己立法の原理こそ、純粹実践理性の根本法則にほかならないのである。この根本法則にもとづく意志の自律によって、各人は自由な主体として行為しうるのであるが、各人の行為の内容と結びついて成り立つ各々の格率もすべて、意志の自律の下でなされることによって、最上位の実践法則である根本法則と一致しうるのである。

ところで、「法則と結びつけられる欲求の対象以外ではありえない意欲の実質が法則の可能性の条件として実践的法則の中へと入ってくるとき、そこから意志〔恣意〕の他律が生じる」とされていた。ここで、「法則と結びつけられる欲求の対象以外ではありえない意欲の実質」(die Materie des Wollens, welche nichts anderes als das Objekt einer Begierde sein kann, die mit dem Gesetz verbunden wird) という言い方は、何を意味しているのか。まず「法則と結びつけられた欲求」というときの「法則」はもちろん道徳法則のことである。即ち欲求が道徳法則と結びついてはたらくとき、その欲求の対象にほかならない「意欲の実質」(die Materie des Wollens) ということである。「実質〔質量〕」(Materie) ということばは、アリストテレス以来の質料・形相の対概念の一方を指し、カントが道徳法則を「形式」(Form) として捉えるのに対してその実質的内容を指すことばとして用いられている。しかも「意欲の実質」あるいは「欲求の対象」は、いずれにしても行為における実質的内容にかかわっており、それは人間の欲求・欲望にもとづいて成り立っている。そこでこのような内容・実質が実践的法則の内に入り込み、道徳法則の可能性の条件になるとすれば、その法則はもはや法則ではありえなくなる。これをカントは、

「意志〔恣意〕の他律」(Heteronomie der Willkühr)と呼ぶのである。それは、「何らかの衝動あるいは傾向性に従う自然法則への依存性」(Abhängigkeit vom Naturgesetze, irgend einem Antrieb oder Neigung zu folgen)であるとされる。「自然法則への依存性」というのは、人間の行為であってもこの現実の世界において行われるかぎり、現象としての自然の法則に依存せざるをえないのであるが、衝動や傾向性のはたらきは現象としての自然に内属するものであって、その限り意志の他律は現象としての世界における自然法則に従い、それによって規定されているのである。従ってその場合、意志は自らに法則を与えるのではなく、たんに「感情的法則の理性的遵守のための指図」(die Vorschrift zur vernünftigen Befolgung pathologischer Gesetze)を与えるにすぎない。ここで「感情的法則」(pathologische Gesetze)とは、先の傾向性に従う自然法則と同じものであり、その法則に理性的に従うことによって、日常生活における合理的実践は可能となるのであるが、しかしそれは道徳法則に従うことではないのである。かくしてこのような、「普遍的立法形式」(die allgemein-gesetzgebende Form)を自己の内に含みえない格率は、責務を根拠づけることができず、むしろ純粹実践理性の原理に対立し、道徳的心術とも一致しえないのである。

#### 4. 意欲の実質と道徳法則

カントは定理4につづく注Iにおいて、行為における実質(質料)と形式(形相)の関係をめぐって、つぎのように述べている。やや引用が長くなるが、道徳法則の基本的な構造を示すと思われるのでそのまま訳出し、全体としてその内容と意義を検討したい。

注I それ故実質的(従って経験的)条件を伴う実践的指図は、決して実践的法則に数えられてはならない。というのは、自由である純粹意志の法則は、意志を経験的領域とは全く別の領域に置き、それが表す必然性は自然必然性ではありえないので、法則一般の可能性の形式的条件の内にのみ存しうるからである。実践的規則のあらゆる実質は、いつでも主観的条件にもとづき、この主観的条件は実践的規則に対して単に制約された普遍性以外のいかなる普遍性も、理性的存在者のために与えないのである(私がこれまたはあれを欲するとき、それを実現するために私は何をなさねばならないか)。そしてそれらの主観的条件はすべて自分の幸福の原理(das Prinzip der eigenen Glückseligkeit)をめぐっているのである。さてすべての意欲はまた対象従って実質を持たなければならないことはもちろん否定できない。しかしだからといって、実質が格率の規定根拠となり

条件となるわけではない。というのはもしそうなるとすれば、格率は普遍立法的形式において提示されなくなるからである。なぜならば、対象の存在への期待がそのとき意志を規定する原因となり、何らかのもの——いつでもただ経験的制約の内でのみ求められ、従って必然的で普遍的な規則の根拠を決して与えない——の存在への欲求能力の依存が、意欲の根拠に置かれなければならないからである。かくて他の存在者の幸福が理性的存在者の意志の対象となることはありうるだろう。しかしそれが格率の規定根拠になるとすれば、我々が他人の幸福の中に自然な満足を見出すだけでなく、共感的な感じ方が人々のもとで伴うような欲求をもそこに見出すことを前提しなければならないだろう。しかしこの欲求を私はすべての理性的存在者において（神においてでなく）前提することはできない。従って格率の実質はとどまりうるが、しかしそれは格率の条件となてはならない。なぜならば、さもなければ格率は法則に役立たなくなるだろうから。それ故に実質を制限する法則の単なる形式が、同時に根拠——この実質を意志に付加しはするが前提はしないために——でなければならない。実質は例えば私自身の幸福でもよい。この幸福は、私がそれをすべての人に与え（私が実際有限な存在者のもとではそうする必要があるように）るとき、ただそのときだけ客観的な実践的法則となりうる——私が他人に対して彼らの幸福をその中に共に含めるとき。従って他の人々の幸福を促進するという法則は、これが各人の意志〔恣意〕にとっての対象であるという前提からではなく、ただ理性が自己愛の格率に法則の客観的妥当性を与える条件として要求する普遍性の形式が、意志の規定根拠となるということからのみ生じる。それ故に対象（他の人々の幸福）は純粹意志の規定根拠ではなく、単なる法則の形式のみが、私が傾向性にもとづく私の格率を制限し、格率に法則の普遍性を与え、かくしてそれを純粹実践理性に適合させるものだったのである。そしてこの制限からのみ、そして他の動機を付け加えることからでなしに、そのとき私の自己愛の格率を他の人々の幸福へと拡張する責務の概念が生じたのである。<sup>(19)</sup>

カントはここで、行為あるいは意欲の「実質」(Materie)と「形式」(Form)について語っているのであるが、この両者はアリストテレスにおける質料(materia)と形相(forma)に対応しており、カントも当然それを前提して論じている。質料と形相は実体を構成する基本的契機であり、互いに他を予想し、いずれを欠いても実体は存立しえない。行為における実質と形式も、いずれも行為あるいは意欲における基本的な要因であって、いずれを欠いても行為あるいは意欲は起こりえない。ただカントは意志の規定根拠としては実質の

面を徹底して否定するのであり、そのとき行為における実質と形式のかかわりはどうなるのかが問題なのであるが、この点についてこの注Ⅰからある程度の理解が得られるのではないと思われるのである。

カントは、「実質的（従って経験的）条件を伴う実践的指図は決して実践的法則に数えられてはならない」という。そしてその理由は、「自由である純粋意志の法則は、意志を経験的領域とは全く別の領域に置き、それが表す必然性は、自然必然性ではありえないので、法則一般の可能性の形式的条件の内にのみ存しうる」ということである。そうすると「実質的条件を伴う実践的指図」と、「純粋意志の法則」としての実践的法則とは、全く別の領域にかかわることになるのだろうか。純粋意志の法則の表す必然性は、「法則一般の可能性の形式的条件の内にのみ存しうる」という。即ち実質的条件を伴う実践的指図と、形式的条件にもとづく実践的法則は、それぞれ別の領域に置かれるというのである。そして一方は自然必然性の領域に置かれ、他方は自由の領域に置かれることになる。カントはつづけて、「実践的規則のあらゆる実質は、いつでも主観的条件にもとづき、この主観的条件は実践的規則に対して、単に制約された普遍性以外のいかなる普遍性も、理性的存在者のために与えないのである（私がこれまたはあれを欲するとき、それを実現するために私は何をなさねばならないか）」という。実践的規則の実質即ち行為・意欲の実質は、それが主観的条件にもとづく故に、「単に制約された普遍性以外のいかなる普遍性も与えない」のである。

「制約された普遍性」（die bedingte Allgemeinheit）とは、「これまたはあれを欲するとき、それを実現するために私は何をなさねばならないか」を指示する規則であり、仮言命法のことである。これが道徳法則を与えないことはすでに明らかである。そして、「それらの主観的条件はすべて自分の幸福の原理をめぐっている」のであり、意欲の実質は各人の幸福に帰着するのであるが、それらはすべて主観的・経験的内容にもとづく故に、道徳的意志の規定根拠とはなりえないのである。

しかしカントはまた、「すべての意欲はまた対象従って実質を持たなければならない」（alles Wollen auch einen Gegenstand, mithin eine Materie haben müsse）ことは否定できない、という。意欲の対象・実質（Materie）が、アリストテレスの質料に対応するとすれば、すでに見たように質料と形相が実体の不可欠の要因であるように、意欲において実質と形式は互いに不可欠の要因でなければならないことは明らかである。しかしカントはつづけて、「しかしだからといって、実質が格率の規定根拠となり条件となるわけではない」という。その理由は、もし実質が格率の規定根拠となるとすれば、「格率は普遍立法

的形式において提示されなくなる」からである。即ちそのとき、「対象の存在への期待が意志を規定する原因となり、何らかのもの〔中略〕の存在への欲求能力の依存が、意欲の根拠に置かれなければならない」のである。しかし、対象の存在への期待が意志を規定する原因となるということは、およそどのような意欲であろうと、人間が行為へと向うときにはそこに前提される事態であろう。対象の存在を期待しない意欲はありえないのである。ただそれ故に対象が意志の規定根拠となるとすれば、その格率は普遍立法的形式をもちえなくなる。意欲の対象は経験的であって、各人各様だからである。意欲の目指すのは対象の存在であるとしても、その対象を目指してなされる行為を方向づける意志の規定根拠は、普遍的な形式でなければならないのである。

カントはつづけて、「他の存在者達の幸福が理性的存在者の意志の対象となる」という場合を取り上げる。しかし、「それが格率の規定根拠になるとすれば、我々が他人の幸福の中に自然な満足を見出すだけでなく、共感的な感じ方が人々のもとで伴うような欲求をもそこに見出さなければならないだろう」とされる。「それが格率の規定根拠になる」ということは、他人の幸福が格率の規定根拠になることであり、しかもそれが道徳法則として是認されるということであろう。しかしもしそうなるとすれば、我々が他人の幸福の中に満足を見出すだけでなく、「共感的な感じ方が人々のもとで伴うような欲求」(ein Bedürfnis, sowie die synpathetische Sinnesart bei Menschen es mit sich bringt)をもそこに見出さなければならないだろう、という。「共感的な感じ方」が伴う欲求は、他の人々の幸福であろう。即ち他の人々の幸福が、自分の欲求の対象となっていなければならない。それは「共感的な感じ方」の人には可能であろうが、しかし人間性そのものに生来そなわっているわけではない。「この欲求を私はすべての理性的存在者において(神においてでなく)前提することはできない」のである。神ならばそのような欲求を生来そなえているだろうが、人間は理性的存在者であるとはいえ有限である故に、他人の幸福を直接自己の欲求の対象とすることを、すべての人において前提することはできないのである。それ故に、「格率の実質はとどまりうるが、しかしそれは格率の条件となってはならない」。もし実質が格率の条件となるならば、実質は普遍性をもたないので、「格率は法則に役立たなくなる」のである。それ故に、「実質を制限する法則の単なる形式が、同時に根拠でなければならない」のである。

この実質は、例えば「私自身の幸福」(meine eigene Glückseligkeit)であってもよい。私自身の幸福が、それ自体で道徳法則とはなりえないことは明らかである。ただこの幸福

も、「私がそれをすべての人に与えるとき、ただそのときだけ客観的な実践的法則となりうる」のである。即ち私が意欲の対象（実質）として私の幸福を考えると、私の格率は普遍的法則とはなりえない。しかしそれ（幸福）をすべての人に与えようとするとき、それは客観的な実践的法則となりうるのである。同じことを意欲の対象として欲したとしても、それは実質による意志規定である故に、道徳法則とはなりえない。それはなぜなのか。おそらくカントにおいて、すべての人の幸福を欲することが道徳法則となりうるかが問題ではなく、それを普遍的立法形式にもとづいて欲するかどうかの問題なのである。「他の人々の幸福を促進するという法則は、それが各人の意志にとっての対象であるという前提からではなく、ただ理性が自己愛の格率に法則の客観的妥当性を与える条件として要求する普遍性の形式が意志の規定根拠となる、ということからのみ生じる」のである。普遍性の形式が意志の規定根拠になるとは、このようなことなのであって、そこに実質が伴わないのではない。むしろ意欲を動機づけるのは実質なのであって、私はいつでも私自身の幸福を願っている。それを自己愛の格率と呼んでよいが、そこに普遍性の形式を当てはめて法則の客観的妥当性を与えることができるならば、そこに道徳法則が成り立つことになるのである。そのとき、「対象（他の人々の幸福）は純粹意志の規定根拠ではなく、単なる法則の形式のみが、私が傾向性にもとづく私の格率を制限し、格率に法則の普遍性を与え、かくしてそれを純粹実践理性に適合させるものだった」のである。従って「傾向性にもとづく私の格率」(meine auf Neigung gegründete Maxime) は、それ自体は自己愛の格率であり道徳性をもちえないとしても、それに「法則の普遍性」(die Allgemeinheit eines Gesetzes) を与えることによって純粹実践理性に適合させ、道徳法則として自らを主張することができるのである。即ち意欲の実質は、それに普遍性を与えることによって道徳性を得ることができ、行為の正しい動機として意志を規定することができるのである。ただそのとき格率に普遍性を与えるものこそ、普遍的立法の形式であって、それが条件となって意志が規定されるとき、形式が意志の規定根拠になると言いうるのである。

## 5. 結び

以上のようにカントは、道徳法則における実質の要因を認め、人間の実践がただ形式のみによって成り立ちえないことを知っている。そして実践における実質の面を集約すれば、行きつく所は幸福であるが、しかしカントは幸福についてつぎのように言っている。

幸福の原理は、格率を与えることはできても、意志の法則に役立ちうるような原理を

与えることは決してできない——それが普遍的幸福を対象とするときでも。というのは、普遍的幸福にとってその認識は全くの経験的所与にもとづくものであり、幸福についての各人の判断はそれぞれの意見——それは非常に変わりやすいものである——に依存しているので、一般的（generell）な規則はありえても、普遍的（universell）な規則はありえない。即ち概して最もしばしば当てはまる規則はありえても、常にかつ必然的に妥当しなければならない規則はありえないのである。従って実践的法則が幸福の上に基礎づけられることはありえない。ここでは意志〔恣意〕の対象がその規則の根底に置かれねばならず、それ故に意志の規則に先行しなければならないという理由で、意志の規則は人が感覚するものに従って経験以外のものに関係づけられえず、それ以外のものに基礎づけられることはありえない。そしてその場合、判断のちがいはかぎりがないのである。この原理はそれ故にあらゆる理性的存在者に同じ実践的規則を課することはない——なるほどそれらの規則は共通の名称即ち幸福という名称の下に立つとしても。道徳法則はしかしただそれが理性と意志をもつすべての人に対して妥当すべきである故にのみ、客観的に必然的なものとして考えられるのである。<sup>(20)</sup>

ここでも幸福の原理は、意志の法則に役立ちうるような原理を与えることはないと言われ、その理由は、幸福の認識が経験にもとづく故に、普遍的内容をもちえないことにある。カントは、「それが普遍的幸福を対象とするときでも」とつけ加える。「普遍的幸福」（die allgemeine Glückseligkeit）とは、万人の幸福ということであろう。幸福の原理は、それが万人の幸福を対象とするものであっても、道徳法則としては役に立たないというのである。これは、先に「幸福は、私がそれをすべての人に与えるとき、ただそのときだけ客観的な実践的法則となりうる」とされたことと、どのように結びつくのか。幸福については「一般的」（generell）な規則はありえても、「普遍的」（universell）な規則はありえないという。そして一般的規則を言いかえて、「概して最もしばしば当てはまる規則」と言い、普遍的規則は「常にかつ必然的に妥当しなければならない規則」と言いかえられて、前者は経験にもとづく故に多様であり、後者は必然性をもつ故に経験的内容を根拠とすることはありえず、従って形式の面から規定されるしかない、とされるのである。そして普遍的幸福を対象とする実践原理も、それが万人の幸福を目指すものであっても、その内容が実質的内容をもつと考えられる限り、実質の面から規定されるものとなり、それ故に普遍的規則（universelle Regeln）を与えることはできないのである。

人間の実践は、それが道徳的实践である場合、意志の規定根拠はその形式の面にあると



される。しかしそれが実践として現実化されるものである限り、常に何らかの目的を目指すもの、現実的・実質的な内容を伴うものでなければならない。即ち実質を伴うことによってはじめて行為もその現実的な意味をもつものとなる。その限り、行為は欲望や感情を伴うもの、傾向性をそこに含むものとならざるをえない。しかしそれにもかかわらず、行為が道徳性の面から見られる限り、それは実質を意志の規定根拠とするものであってはならない。たとえそれが普遍的幸福を内容とするものであっても、それは意志の法則とはなりえない。意志の法則はあくまで形式の面から、即ち純粹実践理性の根本法則によって規定されるものでなければならない。否むしろ人間のすべての実践の根底にはこの根本法則がはたらいていて、それがいわば良心となって、人間の個々の実践を見ているのである。もとよりそれがいつでも意志を規定するわけではなく、通常はむしろ傾向性に支配されて人間は行動しているにちがいない。しかしそうした日常的行為の連関の中で、いつでもいわば潜在的にこの根本法則が意志の原理としてはたらいており、自己の個々の行為を判断し評価しているのであると考えられる。その意味で純粹実践理性の根本法則は、人間生活の全般にわたって人間の実践を根本的に規定している超越論的なもの、そこにおいてはじめて人間の実践と生活が可能となる根本的な条件となっているのではないかと思われる。

#### 注

カントからの引用は、Kant, Kritik der praktischen Vernunft, hsg. von Vorländer, Felix Meiner, 1929 による。他に L.W.Beck の英訳, F.Picavet による仏訳, 宮本・和辻による邦訳, 深作守文訳, 及び宇都宮芳明訳を参照した。

(1)S.21 (2)S.23 (3)S.25 (4)S.25 Willkühr は意志と訳す。(5)S.31 (6)～(9)S.33 (10)S.33f. (11)(12)S.34 (13)S.36 (14)Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, Felix Meiner, 1965, S.54 (15)ibid. S.57 (16)S.36 (17)S.36f. (18)S.39 (19)S.39f. (20)S.41f.

(1997 年 6 月 24 日受理)